

## 新生倉敷カントリー倶楽部記念座談会（2015年8月30日）

**参加者** 大原理事長、星島キャプテン、倉本昌弘プロ、三品アドバイザー  
倉本プロのプロフィール

1955年9月9日生まれ。広島県出身。10歳のころからゴルフを始められて、高校生のときに広島県ジュニア大会優勝、広島に倉本ありと名前が世間に知れ渡った。日本大学に進みまして学生アマなどアマチュアの大会を総なめ。81年にプロに転向、デビューした年に、初戦から4戦のうち3勝優勝されて、あと1回は2位と大活躍、その年6勝し、新人王、そして賞金ランク第2位となる。青木、尾崎、中島のビッグ3に、新星の倉本プロが入られて、さらにゴルフブームとなる。皆さんご存じだと思います。1992年に25勝を達成し、永久シード権を獲得。その後アメリカツアーに参戦。その後ゴルフ場の設計監修なども行いゴルフ界に貢献。2014年にPGA会長に就任。  
この対談の前週にシニアツアーが広島で開催され、最終日に逆転優勝されまして、翌日にこの対談に臨んでいただいた。

本日の演題は『ゴルフの役割とは何か、ゴルフ場の役割とは何か』

私ども、このクラブが開場しまして今年で52周年になります。その中でバブル期のころの非常にお客さんが入って断るのに大変だったと、そういう良い思いをしたスタッフもたくさんおりますが、その後20年が経過しましてバブル崩壊後の中、日本のゴルフ場の立ち位置自体、非常に厳しい局面に置かれていることは確かだと思います。そのあたりを、この演題を念頭に入れ、経営側の大原理事長にこの対談を進めていただきたいと思います。

大原 それでは、改めて本日どうしてこういう会をすることになったかということをお話させていただきたいと思います。実は、星島キャプテン、私、それから会場に居る執行部の皆さん達と、このゴルフ場を本当にどうやって良くしていったらいいんだろうか？ということをしばらく前から真剣に考えておりました。また他のいろんな委員の皆さまがたにもご相談もしながら、藤原社長とともに一生懸命考えてきたのですが、8月1日に、いよいよ新生倉敷カントリー倶楽部の運動を始めようということで職員一同全員で申し合わせをいたしました。そして会員始め皆さんとも是非、いろいろとご一緒に考えながら新しい、より良いクラブを作っていきたいということで職員一同本当に燃え上がっています。そういった意味でよろしくご指導をちょうだいできればと思います。

その立役者と申しますと、まず内輪のほうから。星島キャプテンもちろんな

んですけれども、岩脇特命総支配人、それから大野副理事長、前田監事さんなんかが中心になりまして、立ち上げております。現場では、小野新支配人を中心に具体的に話を進めておりますが、その立役者中の立役者と申し上げていいでしょうか、実は三品さんでいらっしゃるわけです。そして三品さんからいろいろとアドバイスをいただきながら過去3カ月ぐらいになりますか、そのアドバイスを元に、私たちが一生懸命考えて、新生倉敷カントリー倶楽部計画というのができたわけです。

そして、きょうこれも三品さんから聞きましたが、今の日本のゴルフ界のリーダーで、さらにオピニオン・リーダーでもある倉本さんは、同時に日本のゴルフ界の改革の旗手であるということ伺いました。今これからゴルフ界がどういう方向になっていかなきゃいけないのかということを一生涯懸命考えてこのゴルフ界の改革に先頭を切って取り組んでおられるので、この方にぜひ皆様とご一緒に話を聞かせていただいて、このゴルフ倶楽部のこれからを一緒に考えていこうじゃないかというのが本日の会でございます。

ということですので、これからの進め方といたしましてはこのマイクを三品さんにまず差し上げようと思います。それで、その倉本さんをこういうところに呼んでいただいた意図とかそういうこともお話をいただいた上で倉本さんから今ゴルフ界に望まれることは何なんだ、ということをお話いただきまして、その上でゴルフの役割とか、あるいはこれからの、こういうふうに変革していきたいねとかということも星島さんとご一緒に議論をさせていただくというふうな会にさせていただければと思いますので、三品さんよろしく願いいたします。

三品 今、過分のご紹介いただきまして大変恐縮しておりますが、宜しく願いします。本日、倉本PGA会長にご登壇いただいた最大の理由をお話しする前に、日本のプロゴルファーという呼称自体認識をきちんとしておかないといけないのですが、日本にはプロゴルファーという言葉がありますけれども、プロゴルファーの意味とは何なんだろうかということをお考えいただいて、実は倉本会長はトーナメントプロです。プロゴルファーというのはゴルフのあらゆることを全部熟知している人をプロゴルファーと言います。ゴルフトーナメントに出場して、競技ゴルファーとして賞金を狙うプロは、トーナメントプロと言います。またアメリカではゴルフ場にいらっしゃる運営に参画しマネジメントしているプロという存在がありますが、彼らをクラブプロ、それからレッスンをしてレッスン料をいただいているプロをティーチングプロあるいはレッスンプロと言います。彼らをプロゴルファーとは呼ばないんですね。トーナメントプロやレッスンプロと、プロゴルファーとは、そんな仕分けが必要なんで

す。

本日こちらにいらっしゃる倉本会長はトーナメントプロとして、日本あるいは世界でも頂点を極めた方なんですけれども、プロゴルファーとしても素晴らしい考えを持っておられまして、ゴルフのプレーだけではない、あらゆるゴルフの知識をお持ちなんです。こういう方が今日本のゴルフ界全体がどうあるべきかということを実際に考えていただいているんです、そして新たな改革への提言も、いろんな所でされています。これは倉敷カントリークラブの皆さんも、ゴルフのことをもっと知っていただき、さらにゴルファーを増やしていきたいということであればこの方をお呼びして、お話を聞くのが一番ではないかということをお願いしたのです。今日は大変お忙しい中、今回の主旨をご理解いただき、倉敷カントリークラブさんのために、お越しいただいたということです。ですから今日は、ゴルフ場のあり方など、様々なお話いただけると思いますので、お楽しみいただきたいと思います。よろしくお願いたします。

倉本 倉本でございます。久々に倉敷カントリー倶楽部さんにお邪魔しました。実は3年ぐらい前にここ一度プライベートで回らせていただいて、トーナメントで来た時より随分変わったなって印象がありました。1987年の中四国オープンでここを回ったときは確か高麗グリーンだったと思いますが、それがベントに変わり、さらに木々も大きくなって景色が変わったという印象でした。

今日のテーマですが、ゴルフの役割そしてゴルフ場の役割ということなんですが、これは非常に大きく重要なテーマなんですが、ちょっとこの前段階として少し知っていただきたいのですが、現在日本全国にプロゴルファー、つまりプロテスト合格者が5380名ぐらい居るんですね。日本全国津々浦々、各県最低でも5名以上存在するんです。これがゴルフの底辺を担っているのです。今三品さんが言われたプロフェッショナルゴルファー、ゴルフプロフェッショナルという人間たちなんですね。トーナメントプロというのは実は私たちの協会の中にもトーナメントプロの資格を持っているのが2400名ぐらい。ということはトーナメントの資格ではなく、インストラクション、要は人を教える資格を持つてる人間のほうが多くなってきているんです。このレッスンプロですが、皆さんは、トーナメントプロになれなかった人間がレッスンプロだという認識をお持ちじゃないでしょうか？実はこれは違うんですね。レッスンプロというのはゴルフを教える勉強を、PGA内で2年間にわたって150時間以上勉強している人達なんです。トーナメントプロというのは自分がゴルフをやるのがうまく、賞金を争うトーナメントで生活している人たちなんです。ただレッスンなど言葉にすることはなかなかできなくて、教えるのも自分の経験則しかできな

い。けども、レッスンプロは、実は勉強しながらどうすれば人に教えることができるかという専門知識を学んだ人達なんです。ここをちょっと認識を変えていただきたい、と思います。

話はゴルフ場に移りますが、日本には現在約 2400 コース弱存在しています。それから練習場が 2700。そしてゴルフ産業全体で言えば、最盛期の売り上げが約 2 兆円でした。今 1.4 兆円になってしまいました。

ゴルフ人口でいえば 1500 万人だったゴルフ人口が現在 750 万人。先月総務省が発表したゴルフ人口というのは 750 万人しか居ないということなんですね。各ゴルファーが年どのくらいプレーするかっていうと、大体平均的には 11 回なんです。全ゴルファーで 8000 万回強しかプレーしてないんですね。単純にゴルフ場で割ると、入場者数というのは、年間平均 3 万人ぐらしかいないということですね。各ゴルフ場がそれ以上を求めようと思ったらかなり難しいということですね。ゴルファーは減ってきているわけですから、これは将来にわたっていくとゴルフ場が減らない限りは入場者数が増えることはないということになります。

つまりここが我々ゴルフ界にとっては、キーポイントになんです。皆さん、よく考えてみてください。ゴルフやるのにプレー代が安くなりましたよね。それからスタートが取りやすくなりましたね。また道具も買いやすくなりました。いろんな情報も頻繁に入るようになりました。日本のゴルフの歴史 110 年です。その中でこの 20 年が日本のゴルフの歴史の中で一番ゴルフがしやすい環境なんです。つまりプレーヤー側にとっては、今が一番いい環境なんです。つまりこのこと自体が、ゴルファー側とゴルフ場を経営する側やゴルフ業界に携わってる人達には大きなギャップがあるというのが今の日本のゴルフ界の現状なんです。

皆さんが払ってらっしゃるゴルフ税、いわゆる娯楽施設利用税ですが、約 500 億円あるんです。500 億円の大半が県、それから市にあって、このゴルフ税は、例えば兵庫県の吉川市を例にすると、一市民あたり 8600 円ぐらいの収入があるということになるんですね。ということは、皆さんがゴルフを、じゃあここで一斉にやめましようってやめてしまうと、市や町がつぶれてしまう、というところが出てくるぐらい、ゴルファーがたくさん税金払っているということなんです。ゴルファーの皆さんは、市や地方に対してもものすごく大きな役割果たしているんです。その割に、ゴルファーが冷遇されてるなあ、と感じてしまいます。

その理由は、ゴルフはぜいたくなスポーツだし、ゴルフは敷居が高い年寄りの遊びだとか、また接待の温床だとか、いろんなことを言われているのが現状です。今国家公務員法の中にはゴルフをやってはいけないという規定があるよう

なんです。ある時期ゴルフが接待に使われて、ゴルフをやってはいけませんよと、業者間でのゴルフは駄目ですって言って昔の大蔵省、今の財務省を含め省庁は取引先とはゴルフができないという。行っても自分でお金払います。それから、利害関係があれば一緒にプレーしちゃいけないと、こんな規定があるというのが現状です。

一方ゴルフの役割ってというのはどういうものがあるのだろうか、と言いますと、実はゴルフというスポーツは、情操教育にとっては最高なんです。特にジュニア教育にはもってこいのスポーツなんです。何が最高かという、ゴルフは、プレー中は審判が居ないんですね。他のスポーツは全て審判が居て、審判がアウトとも言ってくれるし、セーフとも言ってくれる。それから、私は野球大好きで広島カープのファンなんですが、野球で言えば、ピッチャーが投げますよね、それでバッターをアウト、つまり「殺す」んですね。それから盗塁しようとする人間を「刺す」んですね。野球には、こういう危ない言葉が多いんです。ゴルフはそういう言葉がないんですね。ゴルフというスポーツは、4人でこんな広い場所を共有しながらプレーする。そしてあまり多くの人たちがその時間とスペースを共有できない。目いっぱい入れたとしても1日250人ぐらい。というふうに考えると、じゃあ何を考え、どうしなければいけないか。このゴルフ場をわれわれゴルファーはどう扱っていかなければいけないかということも考えなければいけない。つまりこの広大な土地と1日という時間とどうお付き合いすればいいか、ということを考えなければいけないのです。例えば、私がショットの際、ターフを取ります。もうこの場所は二度とプレーしないので、ほっとけばいいですよ。でもゴルフではこのターフを元に戻すのがマナーです。なぜだと思いませんか。後ろからラウンドしてくる人達のために、自分のせいで傷んだ痕跡を残さないようにしようよということなんです。前をプレーしている人が同様にきちんとターフを元に戻し、整備してくれれば、後から行く自分達が行ったときにはきれいなところから打てるわけですね。ですから、ターフに土を埋めてたり、ターフの芝を元に戻した場所が見つかれば、前の人たちは私達のためにこんなことしてくれたんだ、じゃあ後ろの人のために自分もこうしよう。これはバンカーも同じですね。バンカーも自分が入った足跡をしっかり直す、きれいに直すというのは、やはり後ろから来る人に対してきれいな場所で打ってほしいな、いいショット打ってほしいなという気持ちで直さないと直す意味がないですね。よく、キャディさんが「私直しますから」って言われて、「お願いね」って言って直させる人が居るんですが、実はこれは自分が残した痕跡を人に尻拭いさせるんですよ。こんな恥ずかしいことはないというふうに理解してほしいですね。

ゴルフの精神というのはそういうところに全てがあるというふうに考えていた

だくとゴルフの役割というのはよくわかりますよね？こういうところが、子どもたちの教育や私たちの人間教育の場としてもあるんだろうなというふうに思うんですね。

さらにもう一つ大きな役割があります。これは災害時の避難場所です。これだけ大きな施設があって、なおかつ空調、それから泊まる、寝る場所、お風呂、こんな施設があるのはまずゴルフ場ぐらいしかないでしょう。あと、水がきれいか汚いかは別にして、ゴルフ場には必ず何百トンかの水が用意されています。これは、グリーンに水をまいたり、それから芝生に、フェアウェイに水をまいたりする水が必ずゴルフ場にはあるんですね。これはきれいか汚いか、に関わらず、それは使うことができる水ですので、災害時にはかなり役立つだろうということです。実際に阪神大震災や東日本大震災のときもゴルフ場がかなり利用されたという実績があるわけです。

ゴルフ場はよく環境問題がある、環境保全されてないじゃないかという言われ方をされるんですが、実はまったく逆なんですね。ゴルフ場作ってるときというのは確かに環境破壊をしております。ただかなり厳しい環境アセスメントという行政のチェックを受けて、ゴルフ場は作られています。現在は、ゴルフ場の60パーセントが林帯じゃないと許可されないんです。それからゴルフ場の中には平均850メートルの小川が流れています。それからゴルフ場の中には平均的に80種類の絶滅危惧種がいますね。これはゴルフ場がなくなってしまうと、そういうものも消えてしまうのです。それから一度人間が管理をし始めた里山、ゴルフ場ですが、ゴルフ場がつぶれて管理をしなくなるとひどい環境破壊につながっていくんですね。これは放逐されていく里山っていうのは木も倒れていきます。それから今農薬等は使っているところは非常に少ないんですがでも残留農薬はどんどん流れていきます。残留農薬というのはほとんどゴルフ場内で濾過されていて、外部には出ていないんです。でもこれを人が手を加えなくなれば、残留農薬が外に出ていくことは間違いありません。そういうことも含めてゴルフ場をつぶすというのは非常に残念なことになるのではないかというふうに思います。この辺も含めてさっきも言いましたように、ゴルフ人口が少なくなっていけば当然ゴルフ場は少なくなっていくというのは自明の理で、このピークが来るのが2020年だろうと私は思っています。2025年から2030年にかけては約800くらいのゴルフ場がなくなるんじゃないかという数字も実際にそうなるかどうかは別にして出ているということを考えてとやはりゴルフ場としてはこれからどう勝ち残っていくか生き残っていくかということのことを真剣に考えていかないと生き残れない時代が来るんだというふうに思っています。

この辺、私が最近色んなところでお話をさせていただいているところのごく

一部お話しさせていただいたんですけれどもゴルフ場の占める社会における役割、それからゴルフというスポーツ。特にゴルフは競技という面で考えると、本当にゴルフの一部なんですね。競技っていうところは本当に一部でゴルフというのはもっと大きな多様性を持ったスポーツだろうというふうに思います。特に例えばきょう来られている若い方、私、それから女性一緒にプレイできるスポーツってゴルフしかないんですね。これはテニス、錦織圭と一緒にやりますかと言われて楽しいですか。間違いなく彼は楽しくないはずなんです。でも私今からワンラウンドしましょうといった時に私はワクワクしながらプレーもできるし皆さんもワクワクしながらプレーできる。これは60歳離れていようと、70歳離れていようと一緒に勝負ができて一緒に語らえて、一緒に時間を共有できるスポーツが他にあっていいだろうかというふうに考えると、やはりゴルフの役割っていうのはこれからかなり大きな役割を担っていくんじゃないかなというふうに思います。

大原 ゴルフって世の中からはちょっと逆風に見られてるけれども、本当にそんなものじゃないよと、世のため人のためにすごくなってるんだよというお話を伺いました。ゴルフ場の役割っていうのを今ちょっとまとめますと、いろんな意味での役割がある。一人一人にとって、いろんな方とのお付き合いの場であるとか自分の身体の鍛錬とか、自分の楽しみとかいろんな役割があるだけではなくて、社会的にもゴルフという競技は端的に言って税金の話、これについてはやっぱり言いたいこともありますけれども、税金で支えているということも含めまして環境問題とかいろんな面で社会的にも非常にいいポジションがあるんだよと、それからもちろん私たちが自分が楽しんでいる、プロフェッショナルな競技として、プロ野球も見られ、今陸上もやっていますね。あるいはバレーボールの世界選手権やっていますね、それと同じようなワクワク感を持ってプロフェッショナルな競技として見ることもできると。それからゴルフとともに育つ子どもたちって素晴らしいんじゃないのと。三品さんね、最後のゴルフと共に育つ子どもたちって素晴らしいねということについてもお二人いろいろご協力なすって、実現しておられることがおありと伺っています。そういったもので私たちに何かヒントになることもあるかなと思いますので、それを少しご紹介いただけますでしょうか。

三品 実は私、青木功ジュニアスクールってのがあって、それを一緒に作ったんです。参加資格を「良い子」だけにしたんですね。良い子、つまり先ほど倉本さんがおっしゃったように、自分で審判するスポーツ、つまりうそはつかない、自分でボールが落ちた所グリーンもきちんと整備する、バンカーも



ならず。こういう人たちを育てようという趣旨で良い子という参加資格を作ってスタートしたんです。それと最初の青木さんの教え方を見ると、全くグリップも何も教えないでただ打ってみなさいと言うだけなんですね。打っているうちにいつの間にかゴルフのグリップになってくるんですね。今初心者にはどういうふうにしたらいいかとか、どういうふうにかかしたらいいんじゃないかとかいろいろを言いますが、意外と子どもたちって最初に打とうすると自然に打っている。これがゴルフの原点なのかなと思うんですね。そういう意味では、子どもたちにゴルフ場をどんどん提供してあげるということは非常に大事な事なのかなと常々思っているんです。

土曜日でも日曜日でも3時以降ってお客さん居ませんので、そこにどんどん来ていただいて、そういう提供をするというのは非常にいい話なのかなと。これは倉敷カントリーさんにもこれからお願いしなきゃいけないことなんですけども、何も打てなくて、初めてだから恥ずかしいことはない。そういうことでだんだんうまくなっていくというところを覚えていったほうがいいんじゃないかなという気がするんですね。

それともう一つ、先ほどの倉本さんのお話の、ゴルフ場の役割のもう一つは、スコットランドでできたゴルフ場なんですけども、昔はクラブハウスはなかったんですね。ゴルフ場しかなかった。しかも18ホールじゃなくて5ホールとか10ホールとか20ホールとか、いろんなコースがありました。マッチプレーだったからなんですね。それはともかく、なんでクラブハウスができたかという、その日に一緒にゴルフをやった相手と、戦った相手と一緒にその日のゴルフをその後語り合う場所がない。昔は居酒屋が近くにあって、その居酒屋でゴルフ談義をしていたんですけども、やっぱりこのゴルフ場でプレーした後そこでお酒飲みながらお茶でも飲みながら、きょうのゴルフはどうだったんだ、おまえ強かったな、なんていう話をする場が必要なんじゃないかというところからクラブハウスはできてるんですね。クラブハウスにはそういう役割があるので、本当はプレー終わった後レストランとかそういう所でゴルフ談義をして過ごすという環境はゴルフ場が作っていく必要があるんじゃないかなと。

全英オープンの優勝カップはご覧になったことあるかと思うんですが、ゴブレットっていうワインとかウイスキーとか、そういうお酒を注ぐ器が優勝カップになったんですね。あれは、終わった後みんなでお酒もうよってそういう意味のためのカップなんです。それが象徴されてるんです。1990年だったですか、セントアンドリュースでニック・ファルドが優勝したときに私も居たんですけど、優勝した翌日、空港でまたばったりお会いしたんですけど、そのときカップを裸で持って歩いてるんですよ。ニック・ファルドが。たまたまインタビューしたことがあったんで「どうして裸で持ってるの」って言ったら、「これはも



ともとお酒を一緒に飲むためにあるんだから持って歩くんだ」と。実際飲んだかどうか分かりませんが。そういう役割のものなんですね。そういうゴルフの歴史をひもといていると、今もやっぱりそれを受け継いでいくことが必要だになってところが結構ありますね。それやっぱり倉敷カントリーさんで歴史のあるところを少しずつ取り入れて、会員の皆さんが会員のお客さん、ゲストの皆さんと一緒に楽しむ環境を作ってあげるべきじゃないかなと、僕はいつも思います。

倉本さん、カップを裸で持って歩いたりされます。

倉本 私はカップをもらうことに全く興味がないんですね。なので家にもほとんどカップが残ってないんです。今考えると非常に残念だなと思うんですけども、日本学生を私1年から4年まで4回勝ってるんですね。そのうちの1個だけないんですよ。多分後輩か誰かにあげたんだろうと思うんですけども。そういう状況で、私、勝つことに対しては興味があるんですが、勝った後あんまり興味がないものですから、ただ今三品さんがおっしゃったみたいにゴルフ場の役割、それからゴルフ場のあるべき姿というのは本来はメンバーの人たちがどうあるべきかって考えるべきことなんですね。これはメンバーでないわれわれが倉敷カントリーはこうあるべきだなんていうのはおこがましくてメンバーの人たちがこれから先倉敷カントリーはどうやって運営していくんだ、どういう方向性でいくんだっていうのがメンバーの考えだと思うんですね。私実は広島カントリーのメンバーなんで、西条コースを数年前に直させていただいたんです。理事会から倉本さんは広島出身だし、うちのメンバーでもあるし、直してくれないかと。分かりました、じゃあ直させていただきます、ボランティアでやりますから直させてくださいっていうことで、直させてもらったときに理事会とずっと話をした過程をお話しますと、多分皆さんのこれからの倉敷カントリーのどういう行末っていうのが見えてくるのかなというふうに思うんです。まず改造するにあたって、理事会のコンセプトって何ですかというふうに私が聞いたんです。そしたら「みんなが楽しく」と。メンバーのかたがたが楽しくプレーできるということですねと。分かりました。じゃフェアウェイをこういうふうにしましょう。木はこういうふうに切りましょう。バンカーをこうやって作りましょう。グリーンはこのくらいの大きさにしますって出したんですね。そしたらグリーンが大きいじゃないかと。いや、あなたがた楽しくプレーしたいんでしょと。ちっちゃいグリーンでどうするんですかと。フェアウェイが広すぎる、いやいや、あなたがた高齢で、どんどん年を取っていくのに、フェアウェイいかないで、楽しいですかと言ったら、「うーん」とかっておっしゃるんですね。言ってることと、自分のイメージってこのくらい違うんですよ。実はフ

エアウェイをかなり広くさせてもらったんですね。その代わり、楽しくプレーできるイコール易しくプレーできるではないですよということも私言わせていただいたんです。楽しくプレーできるイコールいつもいろんな場所からいろんなショットが打てる。いろんなシチュエーションが日によって違う。ピンの位置によって違う。それが楽しいプレーじゃないですかと。バンカーを浅くしたり、バンカーをなくしたり、それから木が邪魔だから木を切ってくれ、これは楽しくプレーできないと。お客様に易しいプレーゾーンの提供なんです、ということをご理事会で私は一生懸命説いて。

図面が出来上がってある理事から「倉本さん、このバンカーはみんなが入るんだ」と。「だから、このバンカー埋めてくれないか」と言われたんですね。「いやいや、私は埋めません」と。「私以外の人間にじゃあこれから頼んだらどうですか」と。「私は手を引きます」と言ったら理事長が「いやいや倉本さん、このバンカー本当にね、嫌なんだ」と。「だから、埋めてくれ」と。理事長がそうおっしゃっても、「私は理事長のために作ってるんじゃないんです」と。「このバンカーやこの改造はあなたの息子やあなたの孫のために作ってるんです、あなたが嫌だろうと孫が好きかも分からないですよ」と。「ゴルフ場ってのは、少なくとも今の人たちが楽しめればいいってことじゃなくて、今の人たちがいかにその子どもや孫たちに何を残していったかってことを伝える場所ですよ」ということを理事会で言って、納得していただいたんです。まさしく私はそこが一番重要なポイントじゃないかなと思います。今自分が年を取ってきた、球も飛ばなくなってきた、だからこのティーを前にしろとかこのバンカーをなくしてくれとか、グリーンはもうちょっと平らにしろとかではなく、やはりこのコースをどう残していけば後世の人たちに「うちのじいさんはいいコース残してくれたな、うちのお父さんはこんな所でプレーしてたんだ、うちのお父さんこのバンカー越えてたな」と、これがやはり私たちが残していくべき歴史ではないかなというふうに思うんですね。ですからそういう観点でこのコースを将来どうしていくか、このコースをどう運営していくかというふうに皆さんが知恵を出し合って考えていただければいいのかな。実は昭和32年ぐらいから38年ぐらいというのが日本のゴルフブームの一時期でありまして、地方の名門、これは全国の名門って言われてるゴルフ場が大体このくらいの年代にできあがってきて、ちょうど60周年を迎えたり、50周年を迎えたりというところなんですね。皆さんやっぱり苦労してらっしゃる。というのは、先が見えない、それからメンバーも高齢化してきた。自分の子どもや孫にコースを譲りたい、会員権もゆずりたいけど、あまりゴルフしないと。興味も示さないという人たちがどんどん増えてきて、今かなり苦慮されてる所が多い。それからプレー人口も減ってきて、ゴルフ場の運営がうまくいかない。そのためにはメンバーのかたがた

の年会費を上げなければいけない、でも上げるとなかなかメンバーさんからお叱りを受けたりっていうので、かなり苦慮されてるところが多い。これは広島カンツリーもやはり同じような状況なんですね。

広島カンツリーというのは36ホールあって、年会費が今12万ですかね。ですから、18ホール換算すれば6万円ぐらいの年会費なんですけど、18ホール18ホールでプレーするわけじゃないので、メンバーさんはみんな12万払わなきゃいけないと。上げるときもかなり苦労されて、プレー券やそのいろんなものでお返しをしながら前回の金額にほぼ近い程度のサービスをするということやってらっしゃるんですけども、定着すればあんまり文句を言う人もだんだんいなくなってきて、それからそういう意味ではゴルフ場にだんだんメンバーが来られる回数も増えてきて、最初はコースを直してもものすごく文句言われました。それと、会員説明会という場を設けていただいて、私の設計コンセプトこうです、ああですと説明したんですね。直してからかなり文句言われたんですね。「コースが長くなった」とか、それから「木切ってスカスカになってこんなのおかしい」とかって言われたんですけども、3年ぐらいたつと、言ってらした方が「この木どうでした」って言ったら「あそこ木あったっけ」とか。「いや、きれいになっていいね、明るいよコースが」って。まず木を切るということの利点というのは何かというと、皆さんゴルフ場は芝があって初めてゴルフができるんですよ。木があってもゴルフはできない。木ばかりでもゴルフ場はできないんですね。木が大切か芝が大切かといったら、当然芝が大切なんです。芝を生かすための木っていうのが必要なんですけども、芝を殺す木っていうのは必要ないんですね。芝を殺す木っていうのは何かっていうとまず光をさえぎる木。特に皆さんが一番大切にしなければいけないグリーン。グリーン場に影を落とす木っていうのはできれば伐採するか剪定をする。それから、次に林の中に日が射すと芝が生えるんです。木が密集してくると日を射さなくなるので、裸地になります。裸地になると当然汚いですよね。それから、木が込んでくれば込んでくるほど、木自体が成長が止まります。なので、木を大きくしたい、それから木をきれいに見せたいというならば、邪魔な木はその木を生かすために取るべきだというふうに思うんですね。そういう観点から広島カンツリーの西条コースは木を約1,000本近く切らせていただきました。木を1,000本近く切ったときのコンセプトは、あそこが赤松の林なんですね。赤松の林をいかにきれいに見せるかということで、樅や椎やそれから杉こういう木を切らせていただきました。背丈が伸びなくて葉を張る木っていうのは根っこが出てしまうので、根っこが邪魔になってプレーしづらい、それからその周りは芝が生えないっていうので、それを取ったときにはものすごく葉を張るので目立つ木なんですね。切ったときにはメンバーの方から「あんな大きな木を切りやがって」と

かって言われたんですけども、実はそこに芝が生えてき、きれいになってくると「あの木やっぱりなかったほうがいいよね」っていう評価もいただいた。

ただ、木を切るというのは3カ年、5カ年計画で切っていかないと、これ切れればいい、あれ切れればいいって言ってバサバサ切ってしまうと駄目だっていうこともあるんです。なのでやっぱり3カ年5カ年計画かけてどんどん木を剪定をしていく、それから切っていくってことをやっていければ芝の状態はかなり良くなってきます。ティーインググラウンドによく芝生が生えていないティーインググラウンドありますよね。これの多くの原因は日照不足と松なんかの露が落ちるものですね。ですから枝を切ってあげたり木を伐採することによってかなり改善されるというのはあると思うので、その辺も含めてこれから、この50年の歴史当然あるわけで、50年間全く植栽をしてないってゴルフ場ないんですね。50年間の間にいろんな所に木を植えているんです。それもうちの庭にあるような感覚で、うちの庭にこの木が欲しいねって植えてらっしゃる方が結構多いんです。無計画に植えてらっしゃる方が非常に多い。

それから、私もやはり木を切るときに苦労したのが、記念樹なんです。ホールインワンの記念樹とか、優勝の記念樹が無計画にクラブハウスの周りに植わってる。「これを切りたい」って言ったら、「いえこれ誰々さんの記念樹ですから切れません」と。これ別の広島ゴルフ場なんですけど、一人一人お願いをしてこの記念樹切らせてくださいと。これはクラブハウスから広島瀬戸内海と宮島が見えるにも関わらず木がいっぱいあってクラブハウスから宮島と瀬戸内海が見えなくなってたんです。そのときになんとかしたいって理事長から言われて「この木全部伐採してください」と。みんなが広島のメンバーさんで宮島も瀬戸内海も見慣れてるといふか、ヴィジターが来たとき、遊びに来たとき、メンバーがお客さんをお呼んだとき、あれが宮島だよ、ほら瀬戸内海の島々見てごらんって言えるようなクラブハウスを作りましょうよということで、木を伐採させてもらったっていう経緯があるんです。そういう意味でいろんな木が悪いわけじゃなく、そういう景観、ゴルフ場は何を売り物にすべきかということが決まればコンセプトが決まり、そこに対して何カ年かの計画ができていくということだと思っているので、ぜひその辺も皆さんで知恵を出し合ってこれからの新生倉敷カントリーをどういう方向に持っていくかっていうのを考えていかなければというふうに思います。

三品 今倉本さんの木の切り方、全くその通りで、非常に今心強いお言葉いただいたのかなと。それからご自分のプレーされてる間の、経験則ってのが倉本さんの場合ありますので、非常に参考にしないといけない言葉ですよ。もう一つやっぱり木というのは非常に大事なんですけども、日陰の問題もあります

し、いろいろあるんですけどもう一つはダブルハザードっていう大きな問題があります。特に倉敷カントリーさんの場合は4番の、フェアウェイの右側にあるあのドックレグの右側にバンカーありますけども、あそこに入った場合にグリーンを狙おうと思っても狙えないんですね。つまり前にヤマモモの木が2本、それからその先に松の木、ヒマラヤスギもあったかなと思うんですけど、あれですとバンカーからスライスかけなきゃいけない。バンカーからスライスかけるってのはプロでも大変難しい、こういうのをダブルハザードっていうんですけども、これはあのバンカーに入るとパーがノーチャンス、パーで上がれない、あるいはバーディで上がるというチャンスをなくしてしまう。これはプロをいじめるだけじゃなくてやっぱりアマチュアを特にアベレージゴルファーを相当いじめてしまう。こういうのはうまく改修していかないと楽しいゴルフにならないんじゃないかというところがもう一つやっぱりありますね。それと意外とお気づきにならないのが、木の根なんですね。特にメタセコイヤとかヒマラヤスギとかっていう大きな木になるのは根が上のほうに張っていくんですね。そうすると根が張っていくってことは根の上の芝がなくなっちゃう。つまり水も栄養分もみんなその根が吸い取ってしまうので、よくフェアウェイの端のほうとかバンカーの横にある大きな木の下というのは芝がなくなってますよね。あれは根に問題があるんですね。

ですから、これは木を切らずに根切りという根を途中から切ってしまうと水を吸う役割をしなくなりますので、根切りはしていかなくちゃいけない。やっぱり木を切るのは非常に難しいんですけども、特に倉カンの1番だったですかね、バンカーの中に木があるホールが。グリーンの上にありますね。あれもバンカーの木の真後ろにいった場合にバンカーからフックかスライスかけなきゃいけない。芝の上からフック、スライスかけるだけでも大変なのに、バンカーからかけなきゃいけない状況になってしまう。こういう問題は本当に直していかなくちゃいけない。18番にもありましたね、右側にね。修正方法はいろいろありますので、いろんな提案をしながら皆様のご意見をいただくような形に取れるんじゃないかなと思いますね。

大原 先ほどの、ゴルフは情操教育だよという話、もう一つ戻しますと、先ほどは子どもたちのためにとということも含めておっしゃいましたが、私は実は大人になってからゴルフを始めました。それで感じたのはこれは大人の情操教育でもあるということですね。というのは、さっきものすごい大事なことおっしゃったんですけども、ゴルフは人を殺したり刺したりという言葉、行ないない。自分で管理をして自分で申告をする。そしてボールを打ったときもOBラインの内にあるか外にあるかなんてことは自分で判断をしてやる。

そういういわば自己責任で成り立つスポーツだということですね。私の場合はクラレという会社で当時の副社長から身に染みてたたきこまれたてきたことが三つありました。とにかく迅速、早くやれ。2番目が思いやり。ちゃんと人を思いやってやれと。3番目が一生懸命やれと。とにかく早くやれということについては「ボールのところに来たらすぐ構えろ、構えたらすぐ打て。打ったらすぐ歩け。考えるのは歩きながらでいい。」うちの副社長もいいこと言うなと思ったんですけど、ということをとたたきこまれました。だから、打った後で「うー」とか言って悔やんだりしたらすごく怒られて。「はよういけ」と言われました。

人に迷惑を掛けるなよというのは先ほどもいろいろ話がありましたけれども、徹底的に仕込まれたのは、グリーンとティーインググラウンドでのマナーについてで、「おまえたちこういうことをやったら絶対人の迷惑になるからやるな」ということは徹底的に仕込まれました。3つ目がすごく大事だったんですけども、一生懸命やれと。例えばこう言われました。「4パット目を一生懸命入れろ」。時々。その四つ目のパットなんか「もうどうでもええわ」って打ったらすごく叱られた。「おまえなんだ。ちゃんとプレーを一生懸命やれ」。このことって私としてはものすごい大人の情操教育だったと思います。そういう意味では社会人としてのマナーとか立ち居振る舞いの教育としても素晴らしかったと思います。それからもう一つ、これは日本経済新聞の夕刊に倉本さんが「明日への話題」というのをコラムを書いておられる。その中で今の若いゴルファーたちの何がつまらないかということ、全部教わっちゃって、自分で考えない。こういうのは駄目なんじゃないのという趣旨のことを書いておられます。

倉本 今おっしゃられたとおりです。今実は若者がゴルフをしなくなっているんですね。われわれ今年3月、PGA経営戦略会議で提言書を出させていただいた。その提言書というのはゴルフ人口を500万人増やしましょうということなんですが、その提言書を書くにあたって、いろいろな所でいろいろな調査をしました。若者がゴルフをやらない一番大きな理由は「つまらない」っていうんです。皆さん、ゴルフがつまらないですか。でも若者にとってはつまらないんだそうです。それから次に「お金がかかる」っていうんですね。その次が「敷居が高い」って。じゃあこの三つを一つずつ調べていこうということで、20代30代の若者からアンケートを取りました。その1位がまず「うまくならない」っていうんですね。これは皆さんもそうですよね、なかなかうまくならない。次につまらない理由がまたこれも不思議な理由だったんですけども「時間が長すぎる」っていうんです。1ラウンドやるのにこんな時間かかったんじゃ、とってもじゃないつまらないと。それから次に「お金がかかる」と。これは非常に面白い結果が出てたんですけども、全くゴルフをやらない大学生にゴルフってど

のくらいお金かかると思うっていう質問ですね。平均が7万8000円ぐらいでした。年間。そのくらい金かかるんじゃないかということでした。ゴルフをやってる大学生にあなたはどのくらいお金をかけてますか、これは部活でやってるとかじゃなくて、ゴルフをお父さんがやってるとか、それか周りのお友達がやってるとか。これが6万9000円ってことは、実際にゴルフをやってる子のほうがお金はかけてないんですね。ゴルフをやってない人はゴルフは高いんだという意識を持つてることが明確に分かったんです。それで、ゴルフをこのくらいのお金でこのくらいできますよっていうパッケージを作ろうじゃないかと。例えば年間10万円払うと、ゴルフ場に年3回行けます。練習場に20回行けます。それからレッスンが20回受けれます。それからクラブがハーフセット買うことができます。これで10万円のパッケージを組みましょうというので、今PGAがこれをやろうとしている所なんです。このくらいだと十分10万円でできるんですね。これ以上やりたい方はゴルフ場へもっと行きたければどうぞご自分の資金で行ってくださいと。ただ皆さんがパッケージの会員になっていただくと近隣のゴルフ場で値段を安くしますよ、プロがレッスンする場合にはこういうふうなシステムでやりますよ、それから今ハーフセットだけでもフルセット欲しいといえはそれはこのくらい足してもらえればフルセットになりますよ、それからグレードアップをこういうふうにすればできますよっていうパッケージも組んでいこうということですね。今まさにこれから動き始めていく、メーカーともこれから12月にかけてタイアップをしていくというところなんです。ですから今われわれがゴルフをやり始めた環境それからわれわれがゴルフとして常識こうだよねって思っていることが今の若者には通じないということが今かなり出てきています。

そういう観点からいきますと、理事長がおっしゃったこと別に私は否定するわけじゃなくて、こういうものの考え方というのもありますよというのを一つご紹介したいと思います。

早くやりなさい。人への思いやりそれから一生懸命にやれ、という三つのことを言われたんですが、実はそうではなくプレーは途中でやめましょうよ、途中から始めませんか。ルール、関係ありません。それからカートずっと乗ってすればどうですか。こういうゴルフを提唱しようじゃないか。それからもう一つは1ホールいくらという売り方ができませんかと。例えば5時から来て、私は2ホール回りたい。じゃあ1000円払っていただければ2ホールどうぞと。私は5ホール回りたいから、じゃあ5000円払います、3000円払います。5ホールプレーできませんかと。こういう売り方ができるともって違うゴルフライフができるんじゃないか。先ほど言った途中から始めませんか、途中でやめませんかというのは、皆さんがゴルフうまいわけじゃない、自分はどうもアプローチ



だけやりたいんだよね、自分はドライバー下手だしこんな谷なんか越えないよ、じゃあ谷超えた所まで持ってったらどうですか。じゃあうちのお父さんがティーショット打った横まで私行くわと言ってその横からホールアウトまでプレーしましょう。もしくは自分はパッティングは駄目だと、アプローチも嫌だと。じゃあティーショットも打ち、セカンドも打ってみんなと一緒にプレーするけども、グリーン乗ったら2パットね、ボール拾っという。こういうゴルフもあっていいんじゃないか。ただ、今言った1番の問題点はルールにのっとってないわけですね。ですから競技ができない。逆に言えば競技をしなければ何をやってもいいというのがゴルフなんですね。

もっと逆に言えば、競技をやるときは皆さん本当にちゃんとルールを守ってくださいねってことなんですよ。多くの方とは言いませんけども、例えば月例だとかクラブ競技で「いいぜ、この辺から打って」というのが見受けられるんですね。それは駄目ですよ。でも、スコアカードにスコアを付けなければ、この辺から打っていいね、もうちょっと前から打てばいい、この谷、降りていくの大変だからキャディさん取ってきて、上から打たせてよ、これは全てOKじゃないですかと。

ある夫婦でこんな問題がありました。ご主人も奥さまもゴルフが大好きなんですね。ご夫婦でプレーしてて谷底に落ちました。奥さまがダーッと降りて行って打ちました。ご主人は上から見えてて「ちゃんと打てよ」。奥さんは3回打ちました。「もうこれ私上がらないわ、持って上がるわ」と言ったら、「何言ってんだ。ゴルフはあるがままにプレーするんだ」と。それでその奥さまは本当に何度打っても上がらない。「分かったもう私ゴルフやめるわ」で、本当にゴルフやめられたんです。旦那さんが間違ってるわけでもない。奥さんが間違ってるわけでもないんですけども、そんな不幸が起きるのはなぜかっていうと、マッチプレーでやってないからです。さきほど三品さんがおっしゃったマッチプレーの利点はそういうところにあるんですね。ストロークプレーじゃないので、私ここから打てないわ、じゃあこのホール負けね、で終わってしまうのに、ストロークプレーになった途端にボールをずっとつなげて18ホールいかないと競技が成立しないっていうゲームになってしまったんです。そういうことでゴルフが実はマッチプレーからストロークプレーに変わったことによってゴルフの本来の本質が変わってきてるんです。ですから今のストロークプレーは本来のゴルフの本質ではないというふうに理解をしていただかないといけない。これマッチプレーだったらこんなにいっぱいルールなかったんですね。だってお互いが話し合って「じゃあおまえ、このホール負けな」「はい、カートに当たったら僕の負けでいいですわ」とこれがカートが動いてて当たったのか、誰がボタン押したのか、キャディが付いてたのか付いてないのかによってこれはノーペ

ナですよ、2 ペナですよ、これ R&A なんかに聞いたって分かりやしないですよ。だって動くカートなんかイギリスにないんですから。日本しかないんですよ。共有のキャディ、例えば4人がプレーしてキャディが1人なんて、アメリカに聞いたってヨーロッパ聞いたって誰も答えなんか出ないんです。そんなことないんですから。こんな日本の特殊事情でゴルフが変わってきてるわけですから、そういうことも含めてもっともっとゴルフって大きなものとして見ていただければいいのです。

私の家内がこんな面白いこと言うんですよ。私の家内はプロゴルファーの奥さんですから、倉本の家内ですというのと、プロゴルファーですかとか、元プロゴルファーですかとか、ゴルフお上手なんですよって言われるのがすごく嫌なんですよ。いつもぼやいているのは、じゃあプロレスラーの奥さんは「あなたの必殺技は何ですかと聞かれるか」って言うんです。ゴルフもそうなんです。例えば「ゴルフやりますか」「ああ、やるんですよ」と。「いくつで回ります」私いつもわざと答えるのが「2時間ちょっとです」って言うんです。「スコアは付けてませんから分かりません」普段私、家内とプレーするときってスコアカード持ったことないんです。私競技以外でスコアカード持ったことないです。ほとんどホールアウトしません。ゴルフってそれが、そういう意味では楽しいのではないかなあというふうに思うので、いくつで回るっていうのは競技をやっている話であって、ゴルフをやる人が必ずスコアを付けると思ったら大間違い。プロレスが好きなのと、プロレスをやる人は違いますよね。プロレスを好きなのは見る人が大半なんです。ゴルフが好きの人だって、見るのが好きな人だって居るわけですよ。だから皆さんもきょうの話を聞いてから「ゴルフお好きですか」「好きなんですよ」「ゴルフはじゃあ、プレーされますか」「します、します」という程度の話で終わらないといくつで回りますかって言うといつもいつもスコアを付けていつもいつも競技をやっている方なんだなあというふうにしか思われないので、ぜひその辺も心してもらえればと思います。

そういう意味ではゴルフっていうのは本当にいろんな角度からいろんなものが見えるスポーツだと思いますし、さっきの情操教育に話を戻していくと、私のライフワークでもあるスナッグゴルフ普及を広島でやっております。小学校を訪問してスナッグを教えて、最後子どもたちとスナッグのプレーをして帰る。3時限目4時限目と5時限目6時限目2個やるんです、1日。3時限目4時限目に行って子どもたちにローラーっていうパターみたいなものから、アプローチみたいなものからフルショットまで教えて、終わったあとに一緒にクラスの代表と私が、先生と一緒に1ホールをプレーして最後終わって紙芝居をするんです。その紙芝居は何かというと、子どもたちに、「きょう皆さんゴルフやりましたよね、きょうからゴルファーになりました。ゴルフをやる人とゴルファーは違う

んです、ゴルファーっていうのはどういう人か知ってますか」という話から入っていきます。それでゴルフは他のスポーツにはないものがあります。何か知ってますかという、子供たちはいろいろ球を打つとかなんとか穴に入るとかいろんなこと言います。「ゴルフには審判が居ないんです。」審判が居ないということがどういうことかっていうと自分に正直でなければいけない、それからもっと大切なのはルールをよく知ってなければいけない。それから、最も大切なのは人を許す心がなければいけない。この三つなんですね。この人を許す心は何かっていうと、例えば私がここで水をこぼしました。誰も見てませんでした。「ここで水こぼしたの、誰」「はい、すいません私がこぼしました、ごめんなさい」って言ったときに、君がこぼしたんだな、よく正直に言ったねって言うてくれればいんですけども、往々に大人の社会って「はい私水こぼしました」「おまえが悪いんだ、謝れ」みたいな話になるんですね。そうすると誰も正直に言わなくなっちゃうんです。謝り損みたいな話で、だから隠していくんですね。大人がそんなことをするから子どもたちも見てて、やっぱものを隠す。子どもたちがやはりそこは正直にいろんなことが言えるようなクラスの中での社会を作っていく、正直に自分が謝ったときに「分かったよ、よく正直に謝ったね、じゃ今後こういうことしないようにしようね」って言って許す心がないと、誰も謝らなくなる。

「この三つをみんな大事に、きょうからゴルファーなんだから、ゴルファーはこの三つを大切にするよ。だからみんなきょうからゴルファーになってやっていこうね」というのが紙芝居の締めくくりなんですけども、それを今、広島市140強の小学校があるんですが、やっと今60校を超えました。これからもっとも増やしていきたいと思っています。スナッグゴルフのスクールセットは23万ぐらいするんです。この23万を60校も渡しているんですが、この財源は企業からお金一銭ももらってないんです。私もボランティア。それから私の周りの人たちもみんなボランティアでやってて、その財源は何かというところのペットボトルを買ってもらうのが財源になってます。スナッグゴルフの支援をする機械っていうのを作ってその支援機でペットボトル1本どなたかが買っていただくと約10円寄付をいただけます。これが今広島市に53基ぐらい設置されて、その上がりで全て今賄っている状況なんです。企業のかたがたに負担いただいているのは若干の電気代と設置場所のご提供なんですね。もちろん若干の電気代っていうのはこれ売れば売れた収益は設置した場所の企業の方に入りますが、その中の一部だけいただいています。ある銀行の社員食堂にこれ置いたら、子どもたちにスナッグを今週は2セット寄付させるわよとか言って一生懸命。今までコンビニとかに買いに行ってたんですけども、コンビニ行ったりするのをやめてその支援機で買っていただいて。月間1万本以上売れる

んですよ。そこでは月間 10 万円ぐらいの寄付があるという。

子どもたちに少しでも運動してほしい。なぜこんな思いを持ってるかっていうと子どもたちが 別にゴルフをやってほしいと思っていないんです。いいんです、他のスポーツでもなんでも。スポーツをやってくれば必ず年ととてくとゴルフに戻ってくるだろうと。これ例えば野球少年サッカー少年、年ととてと社会人になって早朝野球まではできますけども、それ以降は運動したくてもできなくなるんですね。そうするとやはりゴルフしかないだろうと。サッカー少年も大人になって社会人になっていつまでもサッカーやってるわけにはいかない。運動したいなと思ったらゴルフに戻ってくる。スポーツ経験がある人間は多分ゴルフに来てくれるだろうと。なので、そういう意味では子どもたちがしっかり運動して、それが将来的にゴルフに戻ってくればいいなという気持ちで今やってる所なんです。大人の情操教育というのは今理事長がおっしゃった、まさしくそのとおりだと思います。一番長い時間一緒に居る、一緒に接しているスポーツなので 性格がすごく分かります。それから猫かぶっていてもすぐ分かります。ごまかす人は絶対ごまかします。ごまかしたら何を失うかっていうと信頼、信用です。人は見てないと思っても結構見てます。このこと分からないだろうなと思ってもよく分かります。ですからその辺は信頼、信用なくしたゴルファーはそこになかなか出入りできなくなってくるので、そういうふうなことにはなりたくないなという意味ではやはり情操教育というのは本当に大人が変わっていかないと子どもも変わらないと思います。その辺も含めて。よろしくお願いします。

ありがとうございます。素晴らしいお話を伺いました。

ここで今日参加している若者たちに質問をいただいて、それを受けて倉本さんに話をいただいて、それで終わらせていただきたいと思います。

試合のときに考えてることはなんですか。

倉本 まず試合のときに考えてるのは、100 パーセントの力を出さないということ。極力自分に余裕がある状況で試合はスタートをし、そこでわれわれよくゾーンっていう言葉ありますよね、これはゾーンというのはうまくいくからゾーンというんじゃないなくて、だんだん調子に乗ってきて、自分がうまくいき始めるとき。そうなってくると黙ってても 100 パーセントいくんですよ。もしくは 110 パーセントいってしまうんですね。最初から 100 パーセントにいとてると、そういう状態になったときにオーバーワークになっちゃう。破綻をきたす。調子いいのになんでここで大たたきしたんだらうってない？ あるよね。それは

調子がいいところが 100 パーセントで、前半来てしまった。もっとできるんじゃないかと思うから破綻をきたしてしまふ。だから試合で考えなければいけないのは、18 ホールやらなければいけないペース配分、36 ホールやらなければいけないペース配分、君なんかも、72 ホールやらなければいけない試合もこれから出てくるだろうから、72 ホールやらなければいけないペース配分、これをしっかり考えて。最初から全力疾走だと最後力なくなるからね。

かと言って、最初に一生懸命抑えて、最後力をとっとくぞといても、予選落ちしたら力を使うことがなくなっちゃう。だからそういう意味ではペース配分というのは非常に大切になる。ペース配分の中でもっと大切なのは、心のペース配分。これは一喜一憂しないという。一喜一憂しないというふうにいうと、今の男子のプロゴルファーそうなんだけど、仏頂面でバーディ。ボギー。これって一喜一憂してないっていうんじゃないんですよ。一喜一憂は心の中でこんなにしてるのに、それをただ抑えてるだけ。ジョーダン・スペース。あーってやってるよね。試合観てて。ドライバー、あーとかって投げてるよね。じゃなんで次のショットがすごいショット打てるのか。彼は外面は一喜一憂してるんだけど、内面はずっと淡々としてるんです。これが今の日本の若者のプレーヤーとアメリカの若者のプレーヤーの違いなんです。アメリカの若者はクラブ投げたりいろんなことしてるんだけど、それは表面上の一喜一憂で、心の中はものすごく平ら。日本のプロはバーディ、ボギーね。すごく淡々とやってるイメージだけど心の中こんなだからね。全く逆じゃない。この辺が非常に大切です。

ありがとうございました。

倉本プロがジュニアのときに試合で最終日のスタートホールとか、最初のホールと最終ホール、観客の人たちがいると思うんですけど、緊張しなかったですか。

倉本 緊張しました。ただ、楽しくて、楽しくてしょうがなかったです。僕は子どものころ、ここにいらっしゃる方はみんなご存じだと思いますけど、昔の練習場のボールって木箱でしたよね、24 個入りの。練習場に行くと木箱 1 個ずつ持ってきてくれて、ここに 24 個入れてたんですけども、僕は子どものころ練習してるときに自分の背の高さまで木箱を積むのが自分の日課だったんです。なぜそれをやりたいかっていうと、周りの大人がすごく注目してくれるから。だから自己顕示欲がすごく強かったんだろうと思うんですね。その周りの人たちが「すごいねきょうも身長分積んだね」って言うってくれる。なので、もちろん緊張はしたけど、すごく大人が見てるってことが楽しかったんです。

僕は子どものころ生まれ育ったのは広島ゴルフクラブ鈴ヶ峰っていうゴルフ場だったんですけども、そこは練習場がなかったんです。そこのメンバーのかたがたも私が1番ホールでフェアウェイに向かってよく練習してたんです。当時ワンハーフやるのが結構多かったんですけども、ワンハーフ目のメンバーさんが来るんですよ。「倉本くん練習してんのか」「すいません、すぐ球拾います」とか言ったら、「いいよいいよ、俺たちはセカンドから行くから」とかってね。そういう人たちだったんです、メンバーさんが。「おまえもっとしっかり練習しろよ、俺たちがティーショット打たないで行くんだからな、でも俺たち4人、OB助かったな」とかって言いながら、そういう時代でね、ものすごくメンバーさんも理解があった。でもその分だけわれわれは期待もかけられ、プレッシャーなんか感じて、緊張なんかしてる余裕もなかった。でもそういう所でプレーすることが楽しかったんですごく楽しんでプレーできました。負けたときは悔しいけども、「でも良かったな、こうやってプレーできたんだから、2位になった、3位になった」ということで、すごく次の励みになったんで良かったと思います。だから、緊張するのはあたり前、でもその緊張している自分を楽しんでみたいのどうかなっていうふうに思います。

大原 ありがとうございます。今のそういうふうな若者たちに対する倉本さんのお言葉を聞いてても、倉本さん本当に子どもたちと一緒にゴルフと育つ子どもたちになってほしいなと思っておられるという情熱が伝わってくるような気がしました。本当に深い感銘を受けました。ありがとうございます。この後は三品さん倉本さんに締めていただくというのがいいと思いますので、最後の一言を三品さん、倉本さんの順番でお願いをしたいと思います。

三品 どうもきょうはありがとうございました。本当に楽しいお話ももらえ、私勉強になりました。やっぱりゴルフ場は何がポイントかということとやっぱり楽しくないといけない。それからゴルフ場自体愛されなきゃいけないとすごい昔から思ってまして、そのためには何をすべきかということを考えていく必要があると思います。スタッフの皆さんとまた一緒に考えて提供させていただくなり、アドバイスさせていただきたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。きょうは本当にどうもありがとうございました。

倉本 どうもきょうはありがとうございました。最後にちょっと一つ二つ、皆さんにぜひお願いしたいと思うのは、ゴルフ場、何度も言うようですけども皆さんの子や孫に残していくものです。ぜひ誇りをもって、自分たちがここでプレーしたんだぞ、俺たちがここ育てたんだぞ、誇りあるコースをぜひ残して

いただきたいと思います。それからここで働いている皆さん、一番最初にお客さんが来るのはフロントです。フロントの対応いかんによってはゴルフ場にもう二度と来たくないとか、このゴルフ場ってすごくいいよね、すごくいいよねって思われた途端にあばたもえくぼなんですね。なのでフロントは一番最初にお客さんが来て、おはようございます。これが一番大切だと思うんですね。それと私、ある違うゴルフ場でアドバイスをしてるのは、名門コースと過去言われてて、やはり没落したコースで、フロントとマスター室と食堂が三位一体で情報を共有しませんかと。これはどういうこととかというと、きょうフロントには誰が来てる。きょうメンバーさん誰が来てるか分かってます。どういうお客さんを連れてきてるか。これも分かるはずなんです。そうすると、そのお客さんがプレーをして、マスター室には何時に、レストランに上がってくるか、これも理解できるわけですね。情報が共有されてると、誰々さまが上がってこられますよ、このお客さんはきょうは仲間内のプレーです、きょうは接待です、分かればレストランで、大原さんきょうはお客さまですか、どうでしたコースは、ってレストランで声かけられると連れてきた大原さんは自分の接待したお客さんに対して、ということですよ。仲間内、きょう、倉本さん、どうでした。どなたが一番いいですか。「分かってくれてるな」と。その「倉本さん、大原さん、三品さん」と声がけされるのが特別だとメンバーは思うんですね。当然ですよ。「自分の名前分かってくれてるんだ、じゃあここにはもっと来よう、もっとお客さんを連れてこよう」こんなささいなことが今までゴルフ場ってフロントもフロント、それからマスター室もマスター室、レストランもレストランで全く情報が共有されてない所がほとんどなんです。なのでそういうちょっとした、お金もなんにも要りません。気遣いだけなんですね。それさえ分かれば本当にお客さんも喜んで来ていただけるし、メンバーさんも胸を張ってメンバーコースに来れるのかなというふうに思うので、ぜひちょっとしたお金をかけない知恵で、メンバーさんが喜んでもらえる、お客さまが喜んでもらえるようなゴルフ場づくりをしていただければなというふうに思います。きょうは勝手なことをいっぱい言わせてもらって、私倉敷カントリーのメンバーでもなければ、よくしょっちゅう回ってるわけでもないんですけども、本当に一般論それから私の経験でいろいろお話をさせていただきました。ありがとうございました。

大原 本当にありがとうございました。今思い出しましたが実は私にとっては倉本さんは倉敷カントリー倶楽部の古い友人でありまして、昔々ここで中四国オープンで優勝されたときのティショットをすぐ横で見えておりました。そのころからの古い友人のつもりですし、すぐ隣の広島ですし、またこうやって



3年前にも来ていただき、きょうも来ていただくということで、非常に感動的なお話、時々笑わせていただきました。

また、三品さんも本当にこういう機会を作っていただきまして、うれしかったですし、今までも本気になっていろいろ私たちのために考えていただけてますけれども、ますます深くいろいろとお付き合いをさせていただければと思います。本当によろしくお願いします。

ということでお二人にもう一度心からなる拍手をしていただければと思います。お二人ありがとうございました。

(了)